

「伝統的な言語文化」 中学校での実践例 ↳ 討議力を高める句会の実践

鹿児島大学教育学部附属中学校

林 涼子

一 はじめに

これまで中学校では、俳句を「読むこと」の学習における韻文学習の一つとして、詩や短歌とともに位置付けてきた。今回、学習指導要領の改訂により、小学校三・四年生の「伝統的な言語文化に関する事項」に、「易しい文語調の短歌や俳句について、情景を思い浮かべたり、リズムを感じ取りながら音読や暗唱をしたりすること」が指導事項として示された。

そこで、中学校における俳句学習を、これまでのように、「俳句を読み味わう」ことに終始するのではなく、第二学年の「書くこと」の言語活動例にある「表現の仕方を工夫して詩歌をつくる」活動や第三学年の「話すこと・聞くこと」の言語活動例にある「相手を説得するために意見を述べ合う」活動と関連付けた指導を行っていきたいと考えた。

二 なぜ「俳句」なのか

本単元「言葉を磨く」は、略語や短文で会話をしがちな子どもたちの語彙力や言語感覚、討議力を高める目的で設定した。吟味に吟味を重ねた十七文字の中に凝縮された作者の思いに触れ、感動を味わうことによって、子どもたちの言葉が磨かれていくと考えてのことである。

三 主な学習活動とねらい

主な学習活動	活動の主なねらい	時間
教科書教材「俳句の世界」を読み味わう。	俳句が描き出す世界を味わわせ、ものの見方や考え方を広げさせる。	3
語句を選び組み合わせを工夫して俳句を創る。	語句の選び方や組み合わせ方を工夫しながら俳句を創らせることによって、語彙力や言語感覚を高める。	2
「句会」を行い、俳句を鑑賞する。	それぞれの俳句のよさについて、根拠を明確にしなから討議をさせる。	1

四 句会で討議力を高める

「俳句の世界」で学んだことを生かして俳句を創作させた後、句会を開いた。ここでは俳句を鑑賞するというねらいとともに、討議力を高めることをねらって授業を創造した。主な学習活動は以下の通りである。

- ① モデルの俳句を参考に、よりよい俳句の選び方について確認する。
- ② 本時の学習目標と学習の進め方を確認する。
- ③ 語句の組み合わせが最も適していると思う俳句を選び、投票する。
- ④ 同じ俳句を選んだ者同士でグループをつくり、俳句の良さをまとめ、他のグループを納得させるための作戦を練る。
- ⑤ 自分たちが選んだ俳句の良さを、他のグループに説明し、その良さを納得させる。
- ⑥ 説明を聞きながら質問や意見交換をする。
- ⑦ 改めて俳句を選び直し、投票する。
- ⑧ 考えが変わった理由について話し合う。
- ⑨ 最終的に一席になった俳句を発表し、作者の思いを聞く。

討議力を高めるためには、自分の考えや意見とその根拠を明確にもつことが大切である。そのために、以下のような場を設定した。

- 俳句を一句選ぶという自己決定の場
- 自分たちが選んだ俳句に票が集まるように、他者を説得するための根拠や訴え方を工夫する場
- 相手を説得する場
- 自分と他者の考えを比較した上で、よりよい考えを選択する場

五 授業のポイント

授業の主なポイントは以下の四点である。

① 自分の考えや意見を明確にしなければならぬという状況に子どもを追い込む。

人任せでなく、自分で意思決定をしなければ、投票はできない。子どもたちは、それぞれの俳句を比較・吟味し、わずか十七文字の中からできるだけ多くの良さやその根拠を探り出そうと四苦八苦する。それを一人で行わなければならないため、必然的に「本気」で取り組むようになる。

② 「自分が選んだ俳句が一席になるように、票集めをする」という、ゲームに近い感覚を味わわせながら、相手を説得したり納得させたりする活動を行わせる。

ここでは、同じ俳句を選んだ者同士でグループをつくらせ、協同で説得するための「作戦」を練らせる。俳句の良さやその根拠を他者にアピールし、他者の考えを変えさせるための作戦を練ることによって、討議を活性化させるとともに、ものの方や考え方を広げたり深めたりさせるためである。

③ 説明を聞きながら質問や意見交換をする場や役割を設定する。

子どもたちは、相手の説明を聞いて納得することが多く、質問したり、相手の弱点を指摘したりすることがなかなかできない。そこで、話し合いを活性化させるために、各グループで、進行係、発表係、質問に答える係、他のグループに質問をする係を決めさせ、各自の役割を明確にさせておく。

子どもたちは、実際に相手を説得したり、相手からの質問に答えたりする過程で、討議の仕方について理解を深めていくのである。

④ 俳句を再度選び直し、再投票させる。

他者の意見や考えを聞いて自分の考えが変わるということは、考えが広がったり深まったりしたということである。再投票することによって、そのことを実感させるのである。

他に、投票用紙を工夫することも大切である。自分が良いと思った俳句番号を書かせるだけでなく、なぜ良いと思ったのか、その根拠まで書かせるようにする。

また、グループで話し合ったことをメモするワークシートも準備しておく。

句会では、四十人が創った俳句の中から教師が六句に絞って無記名で提示した。ある程度完成度の高い俳句を比較することが討議を活性化させることにつながると考えてのことである。時間的にも六句が適切であったと考える。投票に当たっては、各俳句の下にネームカードをはらせ、そのカードをもとに、グループ編成を行った。

六 おわりに

俳句は、今や英訳されたり英語で創られたりするほど国際的になってきた。短詩型の文学として日本が誇る俳句を、子どもたちにも今まで以上に親しませていきたいと考える。

本実践は、俳句という日本の伝統的な言語文化にじっくりと向き合いながら、あまり力まずに討議力を高めることができるという点で、効果的な指導法の一つであると考えている。

はやし りよつこ 平成十五年度より本校に勤務。「豊かな言語生活を営む生徒の育成」というテーマのもと、研究に取り組んでいる。